



TITLE:

新刊紹介

AUTHOR(S):

CITATION:

新刊紹介. 地球 1924, 1(3): 280-282

ISSUE DATE:

1924-04-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/182646>

RIGHT:

に依る價格を其鑑定値段に換算するに基因するものと認められ其不當を鳴らすの聲漸く喧し。

○地理科本試験問題 (大正十三年一月施行)

一、地震計ヲ説明セヨ

二、メルカトル圖法ノ特色ヲ述ベ何故ニ海圖ニハ此ノ圖法ヲ用フルカヲ説明セヨ

三、石狩川流域ノ人文地理ヲ説明セヨ

四、ライン川流域ノ自然地理ヲ説明セヨ

五、北京上海間ノ主要ナル交通線路ヲ列舉シ之ヲ説明セヨ

六、太平洋ニ於ケルアメリカ合衆國ノ勢力ヲ地理的ニ考察シ之ヲ説明セヨ

七、左ノ地ニツキテ知ル所ヲ記セ

イ、プレスブルグ Pressburg (Pozsony)

ロ、徐家瀨

ハ、イラク王國 Irak

ニ、カンベラ Canberra

ホ、世界ニ於テ最も重要ナル無線電信局所在五箇所

ヘ、世界ニ於テ特ニ灌溉工事ニヨリテ開發セラレタル地域五箇所

(注意) 一、二、三、四、五、六ノ諸問題ハ地圖、圖式等を付シテ答フル

ヲ要ス

右四時間

口答問題 第一日

一、諏訪盆地附近の模型を示し其地形の特色と郡邑並に交通路につきて説明せしむ

二、携帶水準儀を與へ其の使用法を説明せしむ

三、太平洋の海圖を示し横濱とヤルト島との距離を同上にて測定せしむ

同 第二日

一、北陸地方の掛圖につきて其地方の地形の特色と郡邑並に交通路につきて説明せしむ

二、アリズマチックコンパスを與へ其使用法を説明せしむ

三、地球儀上に於て東京と某地點(ロンドン、ヤルト、シンガポール等)との間の最短距離を測定せしむ

以上

新刊紹介

○市町村大字讀方名彙

小川琢治著 大正十二年六月發行

本書は市部町名彙及大字名彙の二部より成りすべて正確なる假名遣によりて地名の發音を網羅せり蓋し地名には漢字あり讀方あり、漢字の如き岩手縣の岩を巖と記し大阪の阪を坂と誤るの類川と河と何れが公定せられたるか否や容易に知りたきのみならず其讀方に至つては漢字と全く離れて訛稱其據所を知らざるもの多し。更に濁濁の區別に至ては人によりて差あるを免

がれず、殊に最近市町部邑の發展は郡區町村の改稱廢合を促し
年に新に日に新なるの趣あり、殆んど適從する所無きを慨し小
川教授は大正八年京都帝國大學文學部地理學教室内に我國地名
讀方の定本を作らんことを企て、爾來各府縣郡區役場に照會
して三年五ヶ月漸く地名讀方の定本を得、之を刊行に附したる
もの即本書總クローヌ四百三頁の美本なりとす。各府縣市郡町
村大字全部の讀方始めて據る所を得たりといふべし。印刷に際
し六校に及びし由なるも猶一二魯魚の誤あり、編者は最近に至
り本書に加ふるに重要町の町名讀方をも加へて完璧ならしめん
と目下正誤及町名増刷の途にありと云ふ。書肆大阪南區大寶
寺町西ノ丁二十二、博多成泉堂(定價六圓) (小牧)

○日本地圖帖地名索引

小川琢治著 大正十二年十二月發售

小川琢治日本地圖帖はさきに東京小林印刷所で精巧に刷り上
り、製本のために佃島製本所に廻附し同九月一日に出來上るこ
云ふ瞬間に至つて、大地震火災の難に逢ふた。かくてこの地圖
に關係した編者其他が四年に亘る間の苦心の結晶が一朝に灰燼
となつた、何たる災害であつたであらう。不幸にして印刷所も
火災にかゝつて再び立つ能はざるの打撃をうけたが、幸にも地
圖帖の銅版百數十枚はアスベスト張の石版の中に置かれてあつ
た御蔭で無疵に助かつた、著者をはじめ、書肆の額に手をあて
て祝福したのも無理はなかつたが、さて既に豫約期に後かれて
此始末だから、書肆は更に勇を鼓してこの焼のこつた銅版を印

刷に附することにして、目下大阪森川印刷所で刷らしてゐるこ
の事であるが。右様の次第で地圖の後に世に出づべかりし索引
が、地圖よりもさきに出版されることになつた。この索引に收
められた無慮數萬の地名は其姉妹篇たる讀方名彙の町村名を全
部網羅せる外に山川港海嶋嶼岬角の名に至る全部を收蒐したの
であるが、この方の讀方は大字の讀方よりも更に困難であるか
ら一々、當該郡區役所に照會して得た報告によつたさの事であ
る。地圖を檢索するに便利な外に、此書としての獨立の價值が
ある、それは親切にも、訓音假名遣、字音假名遣の標準を正し
くしたること、或村や山や川が何縣何郡に屬するや否やを一目
して知りうる事の便宜ある外に、鐵道驛名索引があつて、其線
路名と縣名が知られるのみならず、卷末に鐵道讀地名彙があり、頭
字索引になつてゐる一尺八寸山ミカウヤマとか三足一歩山ナ、
ガシラヤマの類を全部網羅してあるといふ點である、全部で四
百八十七頁手頃な本であるが地圖帖を離れて索引だけで日常生
活に非常の便利を與へることを推奨したい(書肆同前(小野))

○京都府北桑田郡誌 (大正十二年三月出版、非賣品)

著者は京都帝國大學文學部の藤田學士である、北桑田郡が田
身地である故に、郡役所からの依頼をうけた後の努力は外でみ
てゐた僕の目にも著しく映じたのであつたが、流石は地理學專
攻の人であるだけに地理に關する記載は從來の郡誌に見るこ
を得ざる趣がある、曰く地形圖、曰く地質圖曰く雨量分布圖曰
く人口密度圖すべて精確なる材料によつてこれを記し地貌の成

因に關しては丹波高原のこの一角がいかに浸蝕されたるかを論じ北部と南部の自然的差異より植林事業惹いては人文の差に及び第三章郡治の部門に於ては王朝時代續日本紀や和名抄に見えた地名のこの郡内に存するものを考定し鎌倉時代以後の莊園關係よりいかに本郡の木材が京都の皇室をはじめ諸寺邸宅に利用されたかといふ事をのべて最近世史に及び交通や社寺や統計をはじめ農業林業の現状をのべて第三編の各村誌には郡内に存する社寺建築美術品の目星しきもの四十七枚のコロタイプを挿入し更に史料附録を加へて七三三頁の大冊になった、京都市立第一女學校教諭小酒井儀三氏が協力執筆の結果である、卷末別に精細な地形圖があり表紙はクローズで山岳重疊の模様を出してある、裝釘極めて高雅、近時稀に見る郡誌である、蓋し郡誌は單に歴史家にのみ任して置くべからざるもので此書の如く必ず地理學者を煩はすべきもの否歴史家と協力せしむべきものであると信する。(小牧)

質疑應答

最近の文檢試験問題に關して各種の質問に接し本欄記者は其應接に遑がないから、こゝに一括して参考書の類を報告することにした。

一、紀伊半島の自然地理

答 小川琢治著近畿地方の土地と住民(京都府教育會發行)の中

に左の如く述べてある。

近畿地方は地貌上三地區に分かれる、南區は紀伊山系と呼ばれて居る、紀伊山系は水成岩から成つた山嶽で日本群島に褶曲作用の起つた時に出来た褶曲嶽の一部である、此褶曲作用は日本海側から加つた横壓力で起つたのであるから、日本の外帶山脈として區別せられて居る。而して此褶曲の走向は壓力の方向と直角に走つて居て、略東微北から西微南に互つて居る大きな河の流路は、此の走向に従つて縦谷を成したものが多く、西岸の紀伊、在田、日高の諸川、東岸楠田、宮川は何れも之に屬して居るが就中著しいのは紀伊川で古生層及び結晶片岩の向斜層を成した地方の北側に沿うて流れて居る、又た山嶽も東西の走向を持て南北兩斜面の分水界をなつて居るものが多く西側で其著しいものは和泉山脈蘇坂嶺、鹿ヶ脊嶺東側の宮川、楠田川及び其支流の縦谷間の多くの判然と走向に従つた分水嶺である。吉野川上流及熊野川は此走向を横斷した所の橋谷で其成因は南北の走向の断裂線に關係があるを考へられる。之を成因を同くしたのは、吉野山脈、半島の最高峰は此方向に列峙して居るが是は南北の断裂線に沿ひ噴出した火成岩の山列である、是は大峯山列として區別するのが適當である、紀伊半島は南中東の三部に分たれて居て中部は此の如く東西部と地質構造の關係から大に趣を異にしてゐる。

小川教授の同書はこの地勢成因論の外に丹波江賀兩原の地勢内外氣候の對照等多くの暗示に富んだ良著で、讀者に一讀をすゝめる、猶本問題參考として見るべきものは